

ねん がつ にち
2020年3月29日
しじゅんせつだいごしゅじつ
四旬節第五主日
きくち いさおだいしきょう せつきょう
菊地 功 大司教 ミサ説教

にんげん にんげん うば さ し きょうふ ふくいん
人間のいのちのはかなさ。人間のいのちを奪い去る死への恐怖。福音
ぼうとう しゅ あい もの びょうき
の冒頭にあったように、「主よ、あなたの愛しておられる者が病気の
さけ きも
です」と叫びたい気持ちです。

ことし しじゅんせつ にんげん かんが しじゅんせつ
今年の四旬節ほど、人間のいのちについて考えさせられた四旬節は
かんせんしょう かくだい なか じしん ふく おお ひと
ありません。感染症の拡大の中で、わたし自身を含めて、多くの人が、
まも てきせつ こうどう よ
「いのちを守るために」適切な行動をとるようと呼びかけつづけて
しじゅんせつ しょき だんかい おお おも こうどう じかん
いる四旬節です。初期の段階では大げさだと思われた行動が、時間
へ きび たいおう ま あ ききかん
を経るにつれて、まだまだ厳しい対応をしなければ間に合わないと感じ
つの じょうきょう にちやへんか つづ
を募らせることになり、状況は日夜変化し続けています。

せかいかくち げんじてん おうべいしょく おお かた かんせんしょう
世界各地で、とりわけ現時点では欧米諸国で、多くの方が感染症の
いのち お げんいん め み し
ために命を落とし、その原因が目に見えないウイルスであるからこそ、死
きょうふ しの よ
への恐怖がわたしたちに忍び寄ってきます。

とうきょうきょうく こうかい かたち しゅじつ と
東京教区がこうして公開の形での主日ミサを取りやめているのも、
なんど きょうちょう じぶん み まも い む
何度も強調してきましたが、自分の身を守るためと言うよりも、無
しょうじょう かんせんげん かのうせい こんかい かんせん
症状のままで感染源になる可能性があるという今回のウイルス感染
とくちょう し じぶん かんせんげん た ひと ま
の特徴のため、知らないうちに自分が感染源となって、他の人たちを巻
こ さ
き込んでしまうことを避けるためです。

じょう いりょうほうかい く と じたく
インターネット上には、医療崩壊を食い止めるために、自宅にとどまっ
よ いりょうかんけいしゃ どうが わたし
てくれるように呼びかける医療関係者の動画とか、「私たちのいのちを
まも いえ よ こうれいしゃ どうが
守るために、家にとどまってくれてありがとう」と呼びかける高齢者の動画

などがあふれています。

コロナウイルス感 染 症 の蔓 延は、わたしたちに、すべてのいのちを守る
ためには、自分の身を守るだけでなく、同時に他者のいのちにも 心
を配る思いやりが 必要なのだとすることを思い起こさせています。すなわ
ち、すべてのいのちを守るための行 動は、社会の中での連 帯と 思いやり
を 必要としています。

わたしたちは、この理不尽な感 染 症 の蔓 延という事態が、どうしてい
まこのときに起こっているのか、わかりません。なぜこのような苦 しみが、
世界にもたらされているのか、その理由を知ることにも不可能でしょう。

教 皇ベネディクト十六世は、回 勅「希望による救い」のなかで、「苦
しみは人生の一部」だと指摘されています。この世界から理不尽な苦 しみ
を取り除く努 力をしなければならないとしながらも、教 皇は、人間
はその有 限性という限 界の故に、苦 しみ の 源 である悪と罪の 力 を
取り除くことができないのだとも指摘します。それができるのは神だけで
あり、神は人間の歴史に介 入 されて、自 ら苦しまれることで、世界
にいやしを与える希望を生み出した。そこにこそ、わたしたちが掲げる希望
があると指摘されます。

その上で、教 皇は、人間の価値は苦 しみとの関 係で決まるのだとして、
こういいます。

「人とともに、人のために苦しむこと。真理と正義のために苦しむこと。愛
ゆえに、真の意味で愛する人となるために苦しむこと。これこそが人間で
あることの根本的な構成要素です。このことを放棄するなら、人は自
分自身を滅ぼすことになります(「希望による救い」39)」

くる きぼう う だ ちから にんげん しん かみ かち い
苦しきは、希望を生み出す力であり、人間が真の神の価値に生きるた
め^ふに、不可^{かけつ}欠^{ようそ}な要素^{くる}です。苦しきは、神^{かみ}がわたしたちを愛^{あい}されるが故^{ゆえ}に苦
しま^{じじつ}れた事実^{おも}を思い起^おこさせ、神^{かみ}がわたしたちを愛^{あい}して、この世^{せい}で苦しむ
わたしたちと歩^{あゆ}みをとともにされていることを思い起^{おも}こさせます。

うば し いた みち くる きよくち
わたしたちにとって、いのちを奪^ういとる死^しに至^{いた}る道^{みち}は、苦しみの極^{くる}地^{きよくち}で
はないでしょうか。

ほんじつ ふくいん あい ゆうじん し くる かな
本^{ほん}日^{じつ}の福^ふ音^{いん}で、イエスは愛^{あい}する友^{ゆう}人^{じん}であるラザ^しロ^{くる}の死^{かな}という苦^{くる}しみと悲^{かな}
しみ^{つう}を通^{はじ}じて、初^{かみ}めて神^{えいこう}の栄^め光^みを目^{かたち}に見^{あらわ}える形^{かたち}で表^{あらわ}します。

じしん みずか じゆなん みち あし すす じゅうじ かじょう
そのイエスご自^じ身^{しん}が、自^{みずか}ら受^{じゆなん}難^{なん}の道^{みち}へと足^{あし}を進^{すす}められ、十^{じゅう}字^じ架^か上^{じょう}
でいのちをささげられます。しかしその自^じ己^こ犠^ぎ牲^{せい}こそは、永^{えい}遠^{えん}のいのちへの
復^ふ活^{かつ}という栄^{えいこう}光^{こう}を生^うみ出^だす苦^{くる}しみでありました。

じんせい ひと ひと くる しんり せいぎ
イエスの人^{じん}生^{せい}こそは、「人^{ひと}とともに、人^{ひと}のため^{くる}に苦しむこと。真^{しん}理^りと正^{せい}義^ぎ
のため^{くる}に苦しむこと。愛^{あい}ゆえに、真^{しん}の意^い味^みで愛^{あい}する人^{ひと}となるため^{くる}に苦し
むこと」を具^ぐ現^{げん}化^かする人^{じん}生^{せい}であります。

せんれい みず とお ふる じぶん し あたら
わたしたちは洗^{せん}礼^{れい}の水^{みず}を通^{とお}ることによって、古^{ふる}い自^じ分^{ぶん}に死^しに、新^{あた}しい
自^じ分^{ぶん}に生^いきることになります。エゼキエル書^{しよ}に「わたしがお前^{まえ}たちの中^{なか}に霊^{れい}
を吹^ふき込^こむと、お前^{まえ}たちは生^いきる」と墓^{はか}にいる者^{もの}たち^つに告^{こと}げ^ばる言^{しる}葉^はが記^きさ
れています。まさしくわたしたちは、洗^{せん}礼^{れい}によって神^{かみ}の霊^{れい}を吹^ふき込^こまれて、新^{あら}
たに生^いかされることになる。

あら い じんせい じんせい けいぞく あたら じん
その新^{あら}たに生^いきる人^{じん}生^{せい}は、それまでの人^{じん}生^{せい}の継^{けい}続^{ぞく}ではなく、新^{あた}しい人^{じん}
生^{せい}です。

あく う か ふっかつ ちから きぼう み じんせい
すべての悪に打ち勝つイエスの復活の力に希望を見いだす人生です。

ひとひとくるしんりせいぎくるあい
「人とともに、人のために苦しむこと。真理と正義のために苦しむこと。愛
ゆえに、真の意味で愛する人となるために苦しむこと」を中心に据えた
じんせい
人生です。

きょうこうにせいしょうかん
教皇ヨハネ・パウロ二世は、書簡「サルヴィフィチ・ドロリス」にお
いて、苦しみの意味を考察されています。

きょうこうかみおんごにんげんあくかいほうせいあた
教皇は、「神は御ひとり子を、人間が悪から解放されるために世に与
えられた」と指摘し、御子は、神が愛される人間の救い、すなわちあが
ないのために、罪と死に打ち勝たなくてはならなかった。そのための戦
いが、イエスの人間としての苦しみの生涯なのだと述べています。

しょうかんおきょうこうまんぜんくるたよ
その書簡の終わりにあたり教皇は、ただ漫然と苦しみに耐えていれば良
いというわけはではないことも、指摘することを忘れてはいません。漫然
と耐えているだけでは、この世における神の国の実現はあり得ないからで
す。神の国の実現のためには、打って出る行動が必要です。

きょうこうきょうかいよひとならい
教皇は、教会が「善きサマリア人」に倣って生きるとよびかけ、
われわれたがかんけいくるりんじんほうむ
「我々お互いの関係は、苦しむ隣人の方に向かわなければならない」
と指摘します。

うえきょうこうくるにんげんじんかくなかあいゆうはつ
その上で、教皇は「苦しみは、また、人間の人格の中で、愛を誘発
するために存在している」とまで述べて、困難に直面する人たち、苦
しみのうちにある人たちへ、徹底的に自己を与え尽くすことによって奉仕
し、寄り添うことが必要であると説きます。苦しみの福音は、善きサマリ
ア人として生きることを通じて、常に「人とともに、人のために苦しむこ

しんり　せいぎ　くる　あい　しん　い　み　あい　ひと
と。真理と正義のために苦しむこと。愛ゆえに、真の意味で愛する人
くる　い　ぬ　しゅ　きぼう　ほうこう
なるために苦しむこと」を生き抜いた主イエスによる希望へと方向づけら
れるのです。

かんせんしょう　まんえん　なか　み　まも　の
感染症が蔓延する中で身を守ろうとしているわたしたちには、すでに述
べたように、「いのちを守るための行動」が必要で、そのためには自分の身
まも　しゃかい　なか　れんたい　おも　ひつよう
を守ることだけではなく、社会の中での連帯と思いやりが必要です。

こんかい　じたい　びょうき　くる　ひと　びょうき　たたか　くる　ひと　けいざい
今回の事態で、病気に苦しむ人、病気との闘いに苦しむ人、経済
あつか　くる　ひと　こよう　うしな　ひと　さまざま　じょうきよう　き　ぎ
の悪化で苦しむ人、雇用を失う人。様々な状況で、いのちの危機
ちよくめん　ひと　しゃかい　そんざい
に直面する人たちが社会には存在することでしょう。わたしたちには
おも　ひと　ひと　くる　しんり　せいぎ
いま、思いやりと共に「人とともに、人のために苦しむこと。真理と正義
くる　あい　しん　い　み　あい　ひと　くる
のために苦しむこと。愛ゆえに、真の意味で愛する人となるために苦し
い　ぬ　もと
むこと」を生き抜くことが求められています。